

# 観 音 立 目



昭和61年1月

第4号

年2回発行  
編集発行

小出真行

## 明けまして お目出度うございます

結果だけが尊いのではない  
ほとけに成ろうとするその努力が尊いのである

(秘蔵記)

ど  
ん  
な

人



生きている間は憎まれて、  
さらわれて、死んだら喜ばれる人

生きておいてもあまり役に立たないが、邪  
魔にもならない。そして死んでも憎まれもし  
ないが、惜しまれもしない。どうでもいい人

で例えばヌルマ湯でオナラをしたような人、  
(ヌルマ湯でオナラをしたら、自分がかさい

くらいで他人にあまり影響のない人)

生きている間、惜しまれ、親しまれる人、  
死んだあととまで、なつかしがられ、惜し  
がられ、したわれる人。

さあ、あなたはどの様な人になりたいです  
か?、最後の様な人になれますように、お互

いにおもいやりをもって精進したいものです  
ね。





尊いものなのです。それゆえに、仏教ではこれを仏性といいます。この仏性は、誰でもが持っているものでありますが、自分自身ですら、気が付かないものなのです。ですから至り相互の仏性を認めようとするところまで至りません。これはお互いに愚痴の凡夫であるがためなのです。

お釈迦さまが、お生まれになった時、「天上天下唯我独尊」と声高らかに唱えたと伝えられています。これは人間尊厳の大宣言なのです。人間というものは一人一人それぞれ尊い心がありその人だけの自己というものをもって居るのです。知能や情操や性格には個人差というものがありません。優れた知能をもっている者もあれば、知能はさほどなくとも情操の豊かな者もおります。人より二倍も三倍も強い意志をもって居ますが情操の干からびた者もいます。しかしそれは相対的なもので、これを基準にしてその人を評価しがちですがそれはとんでもないことなのです。はなはだしい人にいたっては、人の話や世間の噂だけで、その人を全面的にこうだと決めつけかねませんから恐しいことなのです。

ともあれ要するに、このかけ代えのない自分自身というものの尊さは、通常自分では気がつきませんが、これが衆生秘密なのです。自分自身が仏性をもっているながらその仏性を知らないで居るのです。例えば小学生に大学

の教育をする人はいないでしょう。小学生には自分の間、大学の教育はお預けですが、しかし、いつまでもその人に大学教育を授けないというのではありません。如来の秘密もまたこれと同じ事なのです。如来がしばらくの間さとりを秘密にして衆生に与えないまでの話で、しかし、いつまでもそれを秘密にして居るわけではありません。小学生もいつかは成長して大学教育を受けられるようになります。同じように、衆生もまた宗教的に成長したときは如来の慈悲の力が衆生に加わり、衆生の信心のまことがそれを受けるとき、秘密ははじめて開示せられるのです。そして仏性の美しい花はまことの木の実をむすぶことになるのです。

「お地藏さま」



「お地藏さま」は村のはずれや町の辻に雨の日も風の日も立ちつづけて私達を見守ってくださっている点で私達に最も身近で親しみ深い仏さまといえるでしょう。

「お地藏さま」は大地のように慈悲深く、全ての物を産み育てて、人々の苦しみや悩み、願いごとなどかなえて下さるということから「地藏菩薩」と名付けられました。

この「お地藏さま」は、お釈迦さまが入滅せられた後、次に五十六億七千万年の後に弥勒菩薩がお出になられるまでの間、弥勒菩薩にかわって法を説くために、この世に出られた仏さまなのです。人間はこの世での行(業)の報いによって、死んだのちに六つの世界にそれぞれ生まれ変わるとされています。これを「地獄」「餓鬼」「畜生」「修羅」「人間」「天上」の六道といっていますが、この内の「地獄」「餓鬼」「畜生」の三つの世界は苦しみだけの世界です。こうした地獄にも「お地藏さま」は現れて、私達の苦しみを救って下さるのです。

皆様は「さいの河原」をご存知ですか、「さいの河原」は、この世に日の目を見れなかった子供や幼くして亡くなった子供たちが行く地獄です。こうした子供たちはこの世で善行を積む事が出来なかつたり、幼くして死ぬ事によって父母を悲しませたのです。そしてその罪によって「さいの河原」という地獄で苦



しんでいるのです。子供たちは河原で石を積んで遊戯している様に見受けられますが、これはこの世で出来なかつた善行を石の仏塔を積む事によって償おうとしているのです。しかしながらその子供たちの願いは、仏塔の完成まであとわずかというときに、その度に地獄の鬼によって無残にも打ち砕かれてしまい、その上鬼たちは鉄の棒で子供たちを責めたてます。この様な悲惨な「さいの河原」にも現われて子供たちを救って下さるのが「お地蔵さま」なのです。

本当は仏さまの資格がありながら、私達を救って下さるためにあえてお坊さまの姿をして救いを求める者のところへ来て下さるので「お地蔵さま」が右手に持っているそれは六波羅密を示していて、錫杖は上部に小さな環が六個ついています。それぞれ布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧という菩薩の修行の六つの徳目なのです。その錫杖を地上につくと、その響きによって悪獣毒蛇はたちどころに退散するといわれ、左手に持っている宝珠は如意宝珠といい、意のままになんでも与えることの出来る宝珠で、「お地蔵さま」の廣大無比のお力を示しています。

そして私たちを暖かく包んでくれる「お地蔵さま」は、今日では「子育て地蔵」「子安地蔵」「笠地蔵」「延命地蔵」「田植地蔵」など色々な名前が付けられて親しまれているのです。



この世に親なくして生まれた者はありません。一人の人間がこの世に生まれてくるためには父と母があり、そしてその父と母にそれぞれの父と母があります。この様に逆のぼっていきますと三十代前にはなんと十億もの男女が五億組の家庭をもつていたことになりますので驚くべきことです。しかしその五億組の家庭全部が私たちに関係しているのではありません。私たちは、それぞれ直接に自分の家系を継いできた先祖代々の遺伝をうけ、私という一人の人間がここに生まれてきたのでありますから、先祖の良し悪しが私の良し悪しとなり、当然私の良し悪しがやがて我子の良し悪しとなって現われてくるのですからその因果関係は絶対に無視する事は出来ません。そこで私たちは先祖の追善供養をつとめ、悪を善に、禍いを福に転じる行ないが必要になってくるのです。つまり先祖は、現在この世に生をもらっている自分自身の生命の根源なのです。従って、この根を枯らしては太ろうとする幹も、延びようとする枝や葉も衰えてしまいます。自分の生命の発展や向上を願うためには、どうしても生命の根を培かわなければなりません。すでに過ぎ去った過去の生

命を清めんとすることに、現在の我生命の価値を高め、子孫を先祖より、より良いものにしようとする意志が働いているので、そこに追善とか追福という言葉の意味が発見されるのです。良いにしても悪いにしても、現在ここに自分という者が生きています以上、祖先を無視することは出来ないのですから、自分の生命の根源ともいえる先祖に対して恩恵を感じ、報恩のために善行を積むことによって、その家門が繁栄し、子孫の幸福が招き寄せられるにほかならないのです。何故かということ、元来先祖の人たちも子孫の幸福を願ってやまなかつたことでしようから、子孫たるものが先祖の意志を活かして行こうと精進するところに本当の道徳心の温床があるような気が致します。

なにはともあれどうぞ皆様も、この世に生かされているという尊さに気付き、徳を積むような日々を送りたいものですね。

## 編集後記



皆様方の、考え方や人生論等を記載致したく思いますので、どうぞ申し出て下さい。